

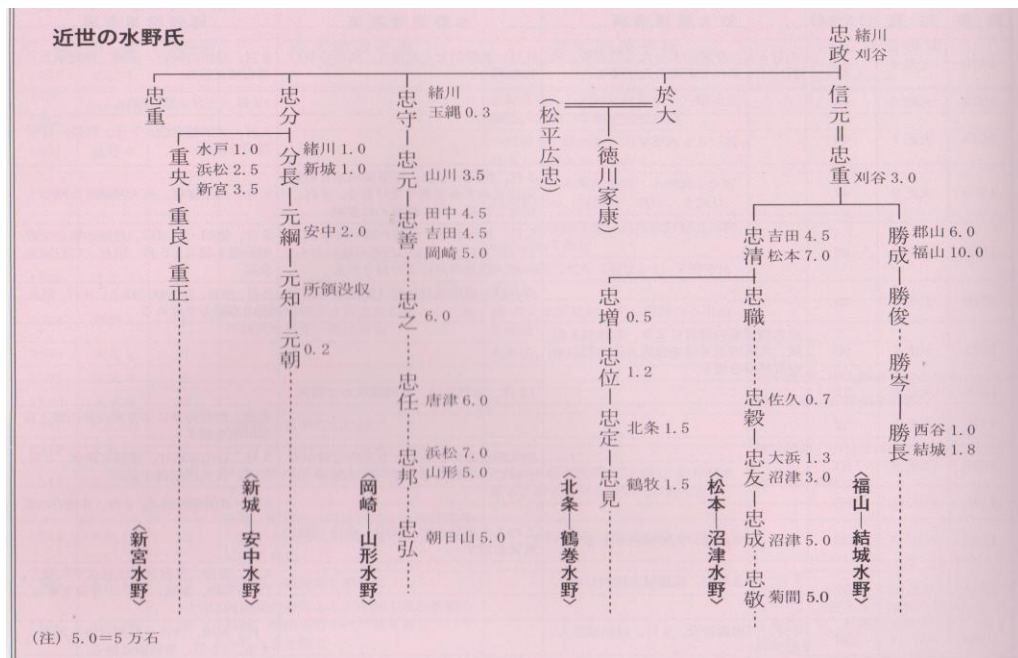
初代刈谷藩主「水野勝成」はどんな人物

郷土資料館主催の歴史講座に参加し、刈谷藩主の水野勝成がどんな人物であったかについて高木庸太郎氏の講義を聞いた。特に桶狭間の戦いの持つ意味と、その後の勝成の活躍について、いくつかの資料に基づき氏の考えを聞くことができた。以前に学んだことも加味して、私なりに話を整理してみた。

1 水野勝成はどんな人物であったか

今回の氏のお話は、すべての大名家の資料を集めた「国書総目録」から、水野勝成に関するものを拾い出して、それらを整理したものという。

まずは水野勝成自身が、嘉永 18 年(1641)記憶に基づいて書いた覚書「水野日向守覚書」がある。これは勝成が永禄 7 年(1564)生まれであることから、78 歳の時に書いたもので、信長、秀吉、家康と同時代を生きた武士が書いた、大変貴重なものといえる。人生 50 年と言われた時代に、78 歳でしかも今でいえば自分史みたいな記録を残したというのだから、並の人ではない。慶安 4 年(1651)88 歳で亡くなるが、他にも「勝成覚書」など多数残していると言う。(下図は東浦町教育委員会「於大の方と水野氏」より)



勘当息子が大変身

以前刈谷市の講座を受講した際、長嶋秀雄氏のお話は次のようなもの……
水野勝成は水野忠重の嫡男として生まれ、鬼日向とか、かぶき大名、放浪の大名と呼ばれた人。兜をかぶらず出陣するとか、父の家臣を殺害し親から勘当されるなどなどして遊歴。主君も信長、家康、秀吉、清正、さらに家康、秀忠、家光に仕え、奔放な生き方が際立っている。そして、慶長 5 年(1600)忠重が殺害されたことで刈谷城主となる。その後元和 5 年(1619)備後福山 10 万石を領し、以後、福山では水田開発、城下への水運、商人町の形成、藩札の発行、上水道を敷くなどすばらしい国造りを進めた。そんなすばらしい指導者だった勝成を、福山では水野勝成を祀る神社に「聰敏神社」となづけ、その徳を慕う人たちが「水野勝成公報徳会」を結成し、毎年 4 月 25 日に奉賛の祭を行っている。

2 桶狭間の戦いと水野信元

勝成の生まれる以前 1560 年に桶狭間の戦いがある、この時水野信元は信長方として、重原・刈谷方面に出陣して、駿河の家康軍と一戦を交えたと記されている。自分が生まれておらず見たことではないが、成長する過程で武士たちから直接聞いた話として記されている。しかし、この戦いで良く分からないのは水野信元がどこにいて、どんな動きをしたのかだ。家忠日記では、水野信元が大高城にいる元康に「義元は討たれた、早く逃げろ」と伝えたとある。では、信元はどこにいてこの情報を得たのか! 今川軍に参戦して寝返ったのか、信長軍を表明して緒川・刈谷城に立てこもっていたのか。今川軍とどこで戦っていたのか不明である。

水野信元は今川方?

H24 年 11 月安城市歴史博物館の第三回松平シンポで、水野信元は水野十郎左衛門のことではないか、とする見方が紹介されている。というのも、桶狭間の戦いに関連する資料で、「水野十郎左衛門」宛ての手紙がかなり多く残されている。また、この水野十郎左衛門が織田信秀へ見舞の書状をだしていること、加えて、今川義元が水野十郎左衛門に、尾張境(桶狭間の戦いと思われる戦)に出陣を要請する手紙を出している。さらには緒川にある入海神社の、神殿造立の寄進奉加名の筆頭に水野十郎左衛門の名前がある。こうしたことから水野十郎左衛門は水野信元ではないかというのだ。

しかし、いずれも確定的な資料はなく、旧岡崎市史では水野十郎左衛門は水野信元として、刈谷市史では謎の人としている。このため東浦町史においても謎としている。

このように水野十郎左衛門は緒川城主水野信元の可能性が高く、今川義元の手紙も時期からして桶狭間の戦い直前の参戦命令である可能性が高い。しかし、緒川・刈谷の水野氏は参戦しなかった。それは、今川軍敗戦後、鳴海城にいた岡部が駿河への帰路、刈谷城を落として行ったことから推定できる。

3 今川義元出陣の目的は何か

永禄3年(1560)5月12日、今川義元(45歳)は20,000の兵を率いて、駿府を出陣しました。掛川へ13日、14日引馬、15日吉田、16日岡崎に着陣し17日には池鯉鮒に着陣します。ここまでは人間が歩く普通の速さで、まさに威風堂々と義元は尾張に侵攻したのです。5月16日には今川義元は岡崎城に入り、18日に沓掛城へ入った。さっそく義元は軍議を開き「19日早朝、松平元康率いる1200人は丸根砦を攻撃すること。朝比奈泰朝の2000人は、鷲津砦を攻撃すること。義元は本隊を率いて出撃する」ということを決定した。一方、丸根砦は佐久間大学盛重ら700人、鷲津砦は織田信平ら400人が守護していた。

今川義元出陣の目的は「海岸部の拠点確保」

「信長公記」から読みとれる信長勝利の要因として、今川軍は前日からの鷲津・丸根攻めと大高への兵糧入れで疲れていた、本隊は鷲津・丸根攻略で勝利気分だった。義元軍は大高道から直接大高城に向かうのではなく、信長軍の本拠地は避けて途中から中嶋砦・鳴海城方面へ向かった。桶狭間(正式には田楽狭間)はくぼ地なので、大軍が通過するには、縦隊になってしまいます。そこを天候も味方にし、一気に突進攻撃した信長の作戦勝ちとされています。

しかし、これまでの戦である小牧・長久手の戦いでは、秀吉軍は家康軍の背後を断とうとして、「中入り」をした。つまり、尾張・三河の通路の海岸部ではなく、丘陵地帯の道を利用した。境川・天白植田川上流地域は、「守山崩れ」以来、織田・松平の係争地域で多くの通路がある。そして、桶狭間の戦いのころは、岩崎・梅森に今川方の武将がおり、時に八事まで今川勢が攻め入ることがあった。それなのに、今川義元はこれらの道を使った作戦を一切とらなかった。本格的に尾張を攻めるのであれば、内陸部での動きがあるであろうし、常とう手段として信長と対立する、背後にいる美濃の斎藤義龍と連携して当然だが、その動きも見られない。このように考えると、尾張に攻め入るのが目的ではなく、また信長と全面对決するつもりはなく、手に入れた鳴海・大高城の確

保が目的ではなかったかと考えられる。ましてや、天下をめざした上洛軍とはとても言えない。

このように、信長軍と正面から対峙していない今川軍の姿がはっきりしている。この点を考えると、今川義元の出陣目的は、伊勢湾への通路確保であり尾張攻略ではなかった。つまりこのことが今川軍敗戦の最大の原因だった。

4 伊勢湾と結ぼうとする今川

今川は長嶋の寺内町・弥富の服部などと手を結んでいた。桶狭間の戦の前、三河の武士たちの今川支配への逆心が相ついでいた。そのため、三河支配の安定のためにも伊勢・三河の海上ルートの掌握が必要だった。そのうえ京都との交信のためにも不可欠な場所だったと言える。

西三河・知多半島の武将の動向が見えない

徳川家康とその直属の家臣たちの、大高攻め参加ははっきりしている。しかし、他の松平一族や梅森・岩崎方面の武士たちはどうであったか？ 久松・佐治・荒尾・大高水野はどうであったか？ この辺りは定かではない、もし、水野信元が参戦しなかったとすると、今川方は水野氏の動きを警戒しなかったか？ 海と結んだ水野ら知多半島や三河の武将たちを服従させるには、海の流通の掌握が不可欠となる。そのため、鳴海・大高は絶対確保しなくてはいけない場所と言える。

このように考えると、今川義元のネライは三河の安定とその先にある上洛を含め、何としても鳴海・大高の確保であったと考えられる。

5 水野勝成の活躍と実績

はじめに書いたように勝成は忠重の嫡男として永禄7年(1564)に生まれ、名を国松という。16歳で初陣、しかし不戦勝で悔し涙。天正9年(1581)高天神城の戦いでは功を上げ、信長より左門字の刀を給う。天正12年(1584)小牧・長久手の戦いで眼疾のため兜をかぶらず出陣。同年、忠重の家臣半兵衛を殺害他国に遊歴すること15年。その間、秀吉、佐々成政、小西行長、加藤清正、黒田長政に仕える。慶長3年(1598)秀吉が亡くなる、そして伏見城で家康に謁見、家康のとりなしで父に勘当を解かれる。慶長5年(1600)7月19日、父忠重が池鯉鮒で石田方の加賀野井秀望に殺害される。これにより本来なら勝成の弟が跡を継ぐべきところであったが、家康の指名により遊歴していた勝成

